
ドラゴンプラネット

級長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンプラネット

【Nコード】

N7928Z

【作者名】

級長

【あらすじ】

プレイヤーがゲームの世界に入るといふ最新型ゲーム、ドラゴンプラネットオンライン。プレイヤー達の熱き戦いが今、始まる！メビウスリングで連載していた分に大幅な加筆修正を加えて転載。最新型ゲームを巡り、様々な思惑が錯綜する。

プロローグ

『私もつとさ、生きてかつたなあ……』
『渚!』

一人の少女が血を流して倒れている。胸から赤い液体がとめどなく溢れる。毎日のように見る、昔の夢。そして、いつもここで目が覚めるのだ。

「朝か。寝オチだなこりゃ」

俺はベッドから身体を起こす。布団に入ったはいいが、そのままゲームをして寝オチだ。いくら携帯ゲームのソフトだからって、一日でRPGをクリアすることないだろう。これはナンセンスだ。

「こりゃ、次の実況に使えんな」

俺は配信するゲーム実況動画の心配をした。もともとRPGは実況動画に向かないし、初見プレイでなければ面白みも薄いだろう。しかもファイナルファンタジー?といえば誰もが馴染みの名作、今更紹介動画も必要ないか。

「次はフリーゲームでホラー仕入れるか。そっぴや青鬼の新バージョン出てたっけ」

動画の心配も早々に俺は支度を始める。これでも高校生なのだから、学校に行かねばならない。

そうなればこのさして広くない、机とベッドに本棚くらいしかない部屋から出なければ。俺は洗面台に行き、顔を洗って年不相応に白くなった髪の毛の寝癖を直す。シリアルで軽く朝食を取ったらブレザーの制服に着替えて出掛けよう。眼鏡がなければほとんど何も見えないので、眼鏡は欠かせない。

俺はある事情により、ある刑事に育てられた。親の行方は依然として知らない。ただ、確かなのは弟がいるということだ。

「弟、か」

俺は玄関でローファアを履くと扉を開けて家を出る。俺が住んで

るのは自動車と味噌で有名な県、愛知。その愛知の味噌である八丁味噌を名物とする岡崎市のマンションだ。別に味噌臭くないぞ。

弟というワードでつい思い出してしまうことがある。しかし、それをのんびり回想する暇はないようだ。クラスメイトを通学路で拾わねば、あとで白髪を弄られる。

そんなわけで俺はそくさと階段を降りてマンションを出る。俺の家は10階だが、エレベーターなど待てない。階段を高速で駆け降りる。エレベーターを使わないのは運動不足解消のためだ。ゲーマーは運動不足に陥り易いからな。

俺は楽々とマンションの一階まで降り立つ。昔から続けてるせい
か息の一つ切れない。他にも最低限の筋トレはしている。

「あら遊人ちゃん。おはよう」

「おはようございます」

マンションから出た俺に声をかけたのは隣のおばさんだ。よくいる主婦みたいで、特徴がないのが特徴といえる。このおばさんは俺を小さい時から知っている。いまだ遊人ちゃん呼ばわりなのはそのせいか。ナンセンスナンセンス。

「最近どう？ 高校とか」

「ええ、特に異常は見当たりません」

「相変わらず回りくどい表現ねえ」

おや、回りくどい表現だったか今の？ 普通に喋ったつもりだが。

「そういえばもうすぐね。渚ちゃんの命日」

「もうこんな時期か……」

渚というのは俺の恩人の名前だ。渚は弟に殺された。俺の弟だ。

「と、こんな話していると遅刻してまう」

「いつてらっしやい」

俺は話を切り上げて出掛けた。朝から湿っぽい話は無しだな。

俺の毎日はこんな感じで幕を開ける。岡崎市という町と共に目覚め、町と共に眠る。こんな毎日がただ続くだろうと、俺は思っている。

ただ、今日の空は雲一つなく、UFOが出たらすぐわかりそうな
感じた。宇宙関係の出会いでもあるかもしれない。そんな気が薄々
していた。

1・ロケイン!

通学路 堤防

「へ? 遊人、あのゲームやってないの?」

そんな毎日の締めくくりたる夕暮れ時、愛知県内を流れる矢作川の堤防で、うちのクラスの副学級長、上杉夏恋が意外そうな声を上げた。

「やってないもなにも、俺はオンラインゲームしないぞ」

この時間帯となると、帰宅部連中が堤防を通って帰る様子がよく見える。この堤防は俺達が通う私立高校の通学路になっている。俺は帰宅部ではないが、今日は動画を作るために帰る。部活の雰囲気も結構フリーダムだし。

「やってると思ったのに、この廃人ゲーマーは」

「人をなんだと思ってる」

夏恋は毒のある言葉を吐き出す。客観的に見て、夏恋は普通に可愛い。この点でかなり残念である。

「せつかくだからやってみなよ。このゲーム、通信費無料だし」

「怪しい。明らかに自分が騙された詐欺を紹介して道連れにしよ
うとしてんだろ」

通信費無料という怪しさの隠し味を、俺は見逃さなかった。なにしようとしてんだよこの毒キノコ。モバゲー等無料ゲームでも、パケット代などが別途でかかるのだ。

夏恋は長い黒髪をなびかせ、赤い携帯の画面を見せ付けた。赤くて明らかな毒キノコカラー。カエインタケみたい。

「その名も、【ドラゴンプラネットオンライン】!」

「! おい、まさかそれ……」

俺は夏恋が自慢げに言ったゲームのタイトル、そして画面のロゴに見覚えがあった。これはたしか、ネットで噂になった奴では?

「そうだよ白髪男！ これは去年に発表された、世界初の全感覚投入ゲームなのだ！」

ドーン、という効果音でも付きそうな勢いで夏恋がいう。夏恋が地味に俺が幼少の頃に失った髪の色素について言ってきたが、完全に思い出した。

「ああ、思い出した。去年、世間を騒がせたあれか」
フルタイプ
全感覚投入とは、ゲーム内にプレイヤーの意識を送り込む技術のことだ。

イメージされるのは、よく漫画とかである「ログアウト不能」とか「ゲームオーバー」死とか、そんなやつ。

「たしか、プレイヤーがアバターに入り込んで、まるで自分がアバター自身であるように操作できるとか」

まさに漫画の世界だ。言葉じゃ上手く説明出来ない。

「そうそう、そんなマイナスイメージばかりだから、政府が規制したりね」

夏恋は愚痴りながらイヤホンを俺に突き付けて言った。

「実際にやった方がわかりやすいよ」

「なんだそのイヤホン」

俺には、何故夏恋がイヤホンを突き付けてきたかわからなかった。ただのイヤホンだ。

「全感覚投入ってくらいだから、装置が必要でしょ？ だから、

その装置、【ウェーブリーダー】」

「これが？」

夏恋は当たり前前の様に言うが、俺はこんなちっこい装置が全感覚投入なんていうオーバーテクノロジーを引き起こすものとは信じれない。

「私のお古。感謝しなさいよ？」

「お古とか……。これ、高いんじゃない？」

「1000円ポッキリ」

「安過ぎだ！ やっぱ嵌めようとしてんだろ！」

「聞こえていれば、君の生まれの不幸を呪うがいい」

「謀ったな、夏恋！　つてお前は仮面の三倍速か！　たしかに生まれは不幸だけどさ！」

「あ、私ここから電車」

「待て赤い彗星！」

夏恋は駅に駆け込むと、ローカル線の赤い電車に乗って戦闘領域を脱出した。

「……………」

俺は夏恋から渡されたイヤホンを手に、彗星の様に過ぎさつた彼女を見送った。

数分後　某マンション

俺の自宅は学校から自転車で行ける距離の場所にあるマンション、その一室だ。

20階建ての内、10階という調度真ん中の階。俺はそこに里親と住んでいる。

「ただいま、つて誰もいないか」

俺の里親、直江愛花、姉ちゃんは愛知県警で刑事をしている。この時間、普段は家にいるがでかいヤマを抱えてると数日は帰れない。若いのに大変なこつた。まあ、実力があるから仕方ない。

案の定、でかいヤマらしくリビングの机に置き手紙がある。

『遊人へ。俺はちよつと厄介なヤマを抱えてるのでしばらく帰れない。帰ってくるまでに俺に勝てるよう、精進するのだな、フハハ』

「くそつ、一回勝ったからつて調子に乗りよつて！　最強なのは俺のメールアドレスだ！」

『俺』つて一人称は普通、アニメやゲームの主人公から移るか、友達から移るものだと人は言う。大抵の男子は親から『僕』つて一人称を無理矢理定着させられるが、途中で『俺』に変わるとも言っ

た。

正直、俺の『俺』は母親代わりの姉ちゃんから移ったんだよ。置き手紙が置かれたのと同じ机には、台座で支えられた2台のロボットがあった。まるで戦ってる様なディスプレイだが、そういう遊びなのだ。

「しかし、俺から提案してなんだが、プラモでこんな遊びしてんの俺らだけだよ……」

互いに見えない位置でプラモをポーリングし、飾った時にどちらの攻撃が決まったかで勝敗を決する。昨日、俺と姉ちゃんはなかなか決着が着かず、最後は俺のエルストライクガンダム（主人公のロボ）が姉ちゃんのジン（量産機）のマシガンで撃ち落とされた。「趣味も姉ちゃんから移ったな……」

ゲームにプラモと、これも姉ちゃんの趣味。俺は両親でなく年の近い姉ちゃんに育てられたから、その分影響を受けたんだろう。

「複雑な家庭……」

それはさておき、俺は自分の部屋に向かう。複雑な家庭なのは承知の上だ。

部屋はちゃんと整理してあるので綺麗だ。姉ちゃんの部屋など、とても足の踏み場はない。

机とベッド、ゲームが並べられた本棚にきちっと積み重ねられた完成済みプラモの箱。そのくらいしか部屋にはない。

「さて、本題はこいつだ」

夏恋から貰ったイヤホン、【ウェーブリーダー】。これで【ドラゴンプラネットオンライン】とやらができるらしい。

俺は部屋のノートパソコン（型落ち品。姉ちゃんからのお下がり）をインターネットにつなぎ、そのゲームについて情報を集めた。コイツはインターネットと動画編集に重きをおいてカスタマイズされている。その点だけなら最新型にも引けはとらん。

「まずは攻略ウイキだ」

俺は攻略ウイキを覗くことにした。案の定、ゲームの情報が沢山

だ。

集まった情報を整理すると、そのゲームは名前をDPOと省略されることと、ゲームそのものは3年前に始まったことがわかった。

さらに突き詰めると、DPO（早速使った）は全感覚投入というオーバーテクノロジーで問題となり、与党の渦海党がつい最近まで大々的な宣伝活動を禁じられていたり、無料で出来るのはインフェルノの資金力とゲーム内に看板を立てることで企業から貰える広告料のおかげだそうな。

アバターは男女逆転不能。脳波を読み取り性別を断定するからだ。ずっとゲームで女アバターを使ってる俺にはちとキツイ。

「ニコニコ動画にあるのか？」

俺は動画サイト、ニコニコ動画でプレイ動画を探した。やはり、ゲームの性質上プレイ動画はなかった。代わりにゲーム内のカメラで撮影された動画があった。見る限りPS3にも劣らない高画質だ。よいグラフィック。だが、肝心のプレイは見られない。

このニコニコ動画で俺は『ナイチンゲール』というハンドルネームを使い、ゲームを実況プレイする動画を投稿している。要は喋りながらゲームをプレイする動画だ。

「やはり俺の次なる実況動画を待つ声が……。ん？ メール？」
そこまで調べたところで、俺の携帯が鳴り響いた。無料で取れる、電流を操る超能力を持った少女が主人公のアニメのオープニングの着メロ。

「この着メロ、姉ちゃんか……」
姉ちゃんしか居ないが、家族のメールには着メロを変えている。メールにはこう書かれていた。

『面白いゲームの情報を拾った。ドラゴンプラネットオンラインというらしい。ログインアプリがコピーインストール出来るから、アプリを入れたSDカードを冷蔵庫に入れておいたよ。やってみたら？』

「なぜ冷蔵庫に入れた！　そしてなにげに弟の背中を押すな！」

SDカードを冷蔵庫に入れるという暴挙にでた姉ちゃんは見ての通りがさつだ。そのせいか、俺の家事スキルが上昇し続けている。姉ちゃんに任せると大惨事確定だからだ。特に料理。冷凍食品くらいならなんとかなるが。

冷蔵庫までSDカードを取りに行き、携帯にカードを入れる。

冷蔵庫の動くん棚の上に、ラップをかけた皿が。その皿にSDカード。

「もし変なゲームだったら、姉ちゃんに責任転嫁だ」

仕方なく、部屋に戻りSDカードに入れられていたアプリでログイン開始。ウエーブリーダーを耳に付ける。

意を決して、ログイン。

「これでゲーム内に閉じ込められて、DPO初の未帰還者になったらどうしよう……」

俺のネガティブな発言は、世界が縦に一回転する感覚に打ち消された。

「で、ここは？」

気がつくと、俺はプレイヤーのマイルームらしき部屋のベッドに寝かされていた。

妙に体が軽く、そして小さく感じられた。髪が長めなのかさらさらした髪が首筋や頬にかかる感覚がある。

まるで自分がアバターであるみたいだ。これが全感覚投入か。アバターにプレイヤーの意識をぶち込むのか。

目の前に青白く光るウインドウがあり、『ドラゴンプラネットオンラインへようこそ』なんて書いてある。

『まずは鏡で、アバターをチェック！』なんてもついでに書いてあるので、言われた通り、広いだけで何も無いワンルーム一人暮らし部屋にぼつんと置かれた大きな鏡に向かう。服屋にありそうな感じの奴だ。

「この部屋、ちょっとSF風味だな」

窓の夜空は宇宙などではない。俺はログイン前の出身惑星選択で、バトルが楽しめると聞いただけで即、【暗黒惑星ネクロフィアダークネス】を選択したのだ。この惑星は一日中夜だそうだ。

「それより、アバターっ」と

先程から、俺の声がハスキーというか女の子みみたいな声だが、これが調べたところによる【ボイスエフェクト】なるものだろうか。アバターの外見とセットになっていて、ランダム生成されるアバターにあわせて選択されるとか。

体をよく見ると、それこそ女の子みたいに華奢だが、気にしすぎだろうか？ ログイン以上に意を決し、俺は鏡を見る。

すると予想通りというかなんというか、

腰の下まで黒髪を伸ばし、赤い瞳をキョロキョロさせる、可憐な少女の姿があった。

「んっ……………！」

そんな馬鹿な！俺は叫びそうになる。しかし、絶句したままの口は叫び声を上げることを許さない。

これは何かの間違いだ。こいつは最近話題の男の娘キャラだ！と、俺は自分に言い聞かせる。

服は初期設定なのか、ちよっと厚手のフード付き黒いワンピース。赤の装飾がカラーバランス的にピッタリかわいらしい。

ワンピース、つまり、ズボンなどはない。

精神的ダメージを増加させつつ、俺は決定的確認に移り、ある場所に触れる決意をする。

つまり胸とか。

「うげ……………」

確信した、このアバターは女だ！　なんかリアルの俺にない感触

がある！ 見た目まな板だから気付かなかった。

夏恋が休み時間にこっそり言ってたし、俺も攻略ウィキで確認したからこそ、この現象が信じがたい。

『異性のアバターの使用は、脳に深刻な影響を残すと熱地学院大学の調査で判明した。そのため法律で禁じられてる』、『故に、DPOでは脳波によって男女を見分け、アバターを生成する』

一時間程度に渡って調べたサイトの情報には、軒並みそんな情報があった。公式サイトも例外ではない。ログイン前に確認したさ、何度も。女アバター使えないのはちとキツイと思いつながらな！

逆にこんな情報もあった、気がする。

『脳波の違いで男女を見分けるシステムだが、開発者の大川緋色氏は「多分、性別逆転事故とかあるかもね。多分だけどね（笑）」と言っている』

「開発者出てこい！ 前に出る、前だ！ ミンチよりひでえや！」
こうして、俺はこの少女のアバターを外見から『墨炎』と名付け、恐らくであるが【ドラゴンプラネットオンライン】初の性別逆転プレイヤーとなったのだ。

2・チユートリアル（前書き）

プロフィール

直江遊人

所属 私立長篠高等学校

血液型 AB型Rh-

誕生日 2月14日（水瓶座）

出身中学 市立関ヶ原中学校

趣味 ゲーム、プラモ作り

特技 料理（特にイタリアン）、チーズを味で見分ける

得意料理 パスタ、ピザ

好物 乳製品

得意科目 家庭科

苦手科目 体育

嫌いな物 日光（色素が薄いので夏場は肌の露出厳禁。夏でも冬服を着る許可がある）

特徴 白髪（自毛登録済み）

2・チユートリアル

翌日 矢作橋駅前

「嘘だと言ってよバーニー……」

翌日のことだ。今だ性別逆転のショックから立ち直れない俺は学校に行くため、夏恋と別れた矢作橋駅前を通りかかった。俺はその後、逃げる様にログアウトしてガンダムVS（格闘ゲーム）をしていた。バーニーのザクでガンダムをフルボッコである。

「ヤッホー白髪廃人アンド眼鏡。アバター作った？」

「赤い携帯？ 夏恋か？ 毒キノコの夏恋か？」

「誰が毒キノコだ」

すると案の定、夏恋がいた。登校の時間帯なので同じ制服の人間がたくさんいる。まるで無双かバサラの雑魚キャラみたいだ。

「遊人は女の子にそんなことばかり言うから、神様が罰として白髪にしたんだよ」

夏恋は不機嫌そうに頬つぺたを膨らませる。学校のブレザーを纏った姿は見目麗しいが、いくら麗しかろうが毒は毒。食べるな危険

「あー。お前、マジで俺が【ドラゴンプラネットオンライン】始めたこと先輩に行ったのか？」

「そうだけど？ もしかしてアバター気に入らない？ ランダム生成だもんね」

夏恋はなんと、俺がアバターを作ったと聞いたら漫画研究部の先輩方に言ったのだ。

てか、アバターってランダム生成なのか。どおりで何もメイキング画面が出てこないわけだ。反転の衝撃でスルーしていた。

おかげで今日の部活は俺のアバターお披露目となりそうだ。あの美少女アバターを。

インターネット機能があれば携帯だろうとPSPだろうとログイ

ン出来てしまうこのゲームの便利さを、俺は恨んだ。

ゲーム研究部 部室

部活の時間。俺はこれだけを楽しみに私立長篠高校に入ったのに、今日は部活は憂鬱だ。ゲーム研究部は元々、テーブルゲームの研究を中心に活動していたが、時代の流れと共にテレビゲームが主体となった。文化祭ではオリジナルのゲームも公開する。

というか、部活の人間ほぼ全てが【ドラゴンプラネットオンライン】ユーザーとは、

「神の悪戯だ……。不幸だ」

俺は歴史ある部、漫画研究部のちよつと広い部室の戸を開ける。

「お、白髪の目立つ遊人が来た」

「気にしてなかったけど言われると」

部室には部長（男子）と夏恋しか居なかった。部長と夏恋はいきなり、俺の白髪ぶりを指摘しやがる。

これが中学の頃より酷く、白い。

「さて、早速アバターのお披露目だ！ オレのアバターより格好悪いよな？」

「私、シヨタ希望」

二年生や残りの一年生はいずこ、という俺の疑問を無視し、部長はと夏恋が俺のアバターに期待（？）する。その期待は残念ながらハズレだろう。

この部の構成は三年生二人に二年生数人（幽霊部員が多いから正確な人数はわからない）、一年生は俺を含め五人だ。

「くそっ、なにが悲しゅうて4月の部活に慣れてない時期に怪しいゲームを部室でしてんだか」

俺は悪態を付きながら、夏恋から貰った専用のイヤホンを携帯と耳につけ、【ドラゴンプラネットオンライン ログインアプリ】を起動する。

「うわ、これ慣れん」

すると、世界が一周回転する様な感覚に見舞われ、俺の意識は途切れた。

全感覚投入って危険だ。椅子に座ってたからいいものを、立っていたら倒れていた。

マイルーム

前にも説明したがプレイヤーは4つある惑星から出身惑星を選べる。その一つ、「ネクロファイアダークネス」が俺の出身惑星だ。

初期設定感たつぷりな自室のベッドで俺は目のアバターを覚ました。このゲームは必ず、自室【マイルーム】から始まるようだ。

「やつぱ参ったな、全感覚投入。これじゃ俺自身がアバターみたいだ」

俺はガキの頃【hack】みたいにゲームの中に入れたらと願ったこともある。しかし、願いというものは残酷で、叶ったらかなり興ざめだ。つか、ボタン操作を極めた俺にとってWi-Fiだのキネクトだのそれ以外の操作は天敵だ。操作が現実の身体と同じなんて尚更だ。

「あれ？ 遊人どこ？」

「奴の部屋に来たんだ。必ずここにいる」

二人の聞き覚えある声が聞こえる。このゲームはアバターの声が決まったら、自分でしゃべる時もその声でしゃべることになる。ボイスエフェクトという奴だ。しかし、この二人の様にボイスエフェクトは切れる。

「お、いたい……た？」

「ま……さか」

二人のアバターが部屋の隅で絶句していた。部長と夏恋には、事前にメールで俺の【マイルーム】への【トランスポーターパス】を渡してある。これで二人は俺の【マイルーム】へ直行出来る。

黒いロングコートのアバターが部長のアバター。名前はジョーカー。赤い可憐なドレスの少女アバターが夏恋のアバター、カレンだ。本名をまんま名前に使ってるようだ。

当然、性別の反転は出来ない。アカウントを作ると、システムがプレイヤーの脳波を読み取って性別を判断し、アバターを自動生成するからだ。『普通』ならな。

「遊人？ 人違い？」

「転送ミスか？」

「たしかに、俺だ。遊人だ」

夏恋改めてリーザのこの慌てよう、当然だ。

俺は初期設定で部屋におかれてる鏡を覗き込んだ。

そこには腰の下まで伸びた黒髪をなびかせ、赤い瞳を照れ臭そうにキョロキョロさせる少女の姿があった。

大事なことだから二回目だぞ！

「男の娘アバター？ 聞いたことない！」

ジョーカーが必要以上に取り乱す。部長の慌てる姿を見るのは始めてだ。

「失礼！ 確認をば！」

「うひゃあ！ 何すんの！」

リーザは俺の後ろに回り込み、いろいろまさぐった。例えば、胸とか。

「うわあ！ こいつ女の子だよ！」

「ああそうですよ！ 恐怖の性別逆転事故ですわ！」

いつもの罵声をかわいらしいボイスエフェクトで言っても迫力皆無。リーザの『確認』はエスカレートする。

「そこは触るなあ！」

「なんだコイツ。やけに感度高いぞ。小さいほど感じやすいってのは本当だったのね」

「あつ、ダメ……くすぐつたい……」

「これがええんのか！」

「ひうつ！ そこは……あ」

「凄い演技力。遊人……。恐ろしい子……」

「これは……、演技じゃ、ない……」

いろいろ弄られ、意識が遠退きかけた俺は、性別逆転の恐ろしさを体感する以外になかった。

数分後 ネクロファイアダークネス 墜ちる事なき天下人の居住

「やつて来ました戦闘フィールド！」

「待て、俺のアバターの問題は無視か！」

夏恋改めることなくカレンがネクロファイアダークネスの戦闘フィールドで元気にはしゃぐ中、俺の性別逆転事故は無視されていた。一緒にいる部長改めジョーカーも同じく無視を決めこんだ。

「まずはこの悲惨な事故をインフェルノに伝えるべき！」

「そのアバター、破棄するの？ もつたいない」

「変な理由で俺の脳に深刻な影響を生むな！」

現在地はネクロファイアダークネスの戦闘フィールド、【墜ちる事なき天下人の居住】。なんかワープ装置らしきものの端末でリーザがピコピコやったら、ここに転送された。

「まず、自分の視界左隅をご確認下さい。そこにある緑のバーがHPゲージです」

「これが」

俺はリーザの言う通り、視界左隅の手頃な距離に浮かんでるHPゲージを確認した。ゲージの上には【墨炎】とアバターの名前があった。ナイチンゲールといつものハンドルネーム使用も考えたが、どうせ後で破棄するアバターだ。適当でいいや。

「そして、私とジョーカー部長の頭上に青いゲージがあるはず。

これがパーティーメンバーのHPゲージ。私と遊人、ジョーカー部

長は同じパーティーにいるの」

「パーティーは最大4人だ」

フムフム、成る程。さすがにキャリアが違うな、夏恋。

基本を学んだので、フィールドを見渡す。【墜ちる事なき天下人の居住】とやらはネクロフィアダークネスにあり、夜空が荒廃した町の上に広がる。どこかで見覚えがあると思っただらこれは岡崎城じゃないか。岡崎城はあの徳川家康が生まれた場所だ。このフィールドは実際の名所を元に作られているのか。

その時、影が地面から這い出した。

「なんだ？ 敵か？」

「シャドウ、ネクロフィアダークネスの基本的なモンスターね」
シャドウとカレンが呼んだそいつは、人の形をした影そのものの姿をしている。

「武器を取って！ 戦うよ！」

リーザが腰の剣帯からレイピアを抜く。ジョーカーは拳での戦闘らしく、手にグローブをはめてる。

「ていうか、数が多い……」

シャドウは凄まじい数群れを成して俺達に襲いかかってきた。

俺も武器を抜く。腰のベルトの左右に取り付けた鞘から、二本の片手剣を抜いて、双剣スタイルになる。この剣は始めにマイルームの倉庫に入れられていたものだ。【ロングソード】という初期臭全開な剣だ。

「双剣？ 難しいよ、それ」

「始めは片手剣だけだったけど、なんか左手が空いているのが気になっただけ」

「お手々が空いてるなら、手を繋いであげたのに」

「お断りする！」

夏恋の軽口をあしらいつつながら、俺はシャドウに向き直る。

「さて、まず技を使ってみよう」

「技って、ボタンも無しにどうやって？」

リーザはシャドウの一匹にレイピアを向け、突きを放った。

「【レイジ】」

レイピアは青いエフェクトを放って、シャドウに突き刺さる。シャドウは倒れた。シャドウは青いポリゴンになって爆散する。

「今のが？」

「今のが【技】。プレイヤーが最初の動きを行うと、後はシステムが体を動かしてくれるの。技の名前を口にする効果的。スキルがあるなら始めから一つは技を使えるはず」

そうか、と俺は頷き、シャドウに右手の剣を向けた。戦闘前にスキルというのを確認しておいた。確認作業は大事だな。

「【ライジングスラッシュ】！」

発動したのは【片手剣術】の基本技、【ライジングスラッシュ】。単なる水平斬りだが、攻撃力補正が高い。【片手剣術】は片手剣、つまり俺が使ってるロングソードの様な武器を装備するだけで手に入るスキルだ。二刀流するにも特別なスキルは必要なく、左にも剣を装備すると【双剣術】スキルが手に入る。

剣が青いエフェクトを放ち、シャドウを薙ぎ倒す。何匹かまとめて屠った。

「さて、ネクロフィアダークネスの戦闘は緩くない。まさに無双だ」

ジョーカー部長は技名を言わずにシャドウを技で殴り飛ばした。慣れるとあんなことも出来るのか。

アバターのお披露目だったはずが、いつの間にか協力プレイ。ひとまず、ボタン操作とまったく違う全感覚投入のバトル感覚は慣れるまで時間がかかりそうだと思っただ。

数十分後 部室

「全く、本当何が悲しゅうてこんなゲームしてんだか」

一旦の練習を終え、俺と夏恋、ジョーカー部長は現実に帰って来

た。

「ホント、何が悲しゅうて……」

「誘った本人が言うな！」

ひとまず、俺は時計で時間を確認した。向こうには1時間ほどいたはずだが、こっちでは10分しかたつてない。5倍の時間が向こうで経っているというのか。

「意識の引き延ばしによる時間の延長、だっけか」

「このゲーム、オーバーテクノロジーの塊だからね」

俺と夏恋は話しながら、部長の方を見た。しかし時間の引き延ばしなどしたら、向こうの世界での待ち合わせは大変そうだ。1分ログインが遅ければそれは5分相手を待たせることになる。プレイヤ―はリアル以上に時間厳守を求められる。

部長は新聞なんぞ読んでる。部屋には新聞が積み重ねてるのだ。

「今日は【サイバーガールズ】の記事はないか……」

「残念そうですね」

「便りが無いのは無事な知らせさ」

まあ、部長は【サイバーガールズ】なるアイドルグループのファンだ。ゲーマーによるアイドルグループで、俺も一時期興味を持ったが大したゲーマー性でなかったため放れたのだ。デビルメイクラの最高難易度DMDモード出す前にへばるとか、本番はDMDモード出てからなのに。

「おしメンは赤野鞠子さんだ」

「聞いてません」

「実は14歳らしい」

「とんだ労働基準法違反？」

「ぎりぎりだ」

「ぎりぎりじゃん！」

しかし、さつきから夏恋が会話に入らないことが気掛かりだ。俺は夏恋の方を見た。

「ぐー……」

「おい」

寝てやがる、立ったまま。弁慶の立ち往生か。弁慶夏恋、否、武蔵坊夏恋か。

「寝たら死ぬぞ」

「はっ！ しまった！ なんか最近、寝ても疲れがとれなくて」

「そういや、授業中もぐーすか寝てるしな」

こいつの場合、寝てるかどうか怪しい。ずっとBL的な妄想膨らまして夜が明けるタイプの人間だ。昨日なんか、クラスメイトを【攻め】と【受け】に分けてたし。

「そういえば、遊人って攻めだよな」

「黙れ妄想女！」

「ふふふ、腐女子の妄想に限界は無いのだよ遊人くん。その気になれば床と天井でBLできる」

夏恋は筋金入りの腐女子。言っただけ止まるやつじゃない。俺はあらゆることを諦めた。

「しかし、最近の若いやつは凄いで。鞠子さんの記事と同じページだが、この松永順って奴はお前らと同じ年なのにノーベル賞候補だし」

「はいはい、新聞はシュレッダー」

「ぎゃー！ 鞠子さんの記事のページだけ丁寧に！」

部長が全力でうなだれた。本気で可哀相だが、こうでもしないと部長は止まらない。

「さて、俺は帰りますよ。なんか萎えました」

「遊人め……。お百度参りで呪ってやる……」

「お百度参りは呪いじゃありませんよ」

俺は部長と夏恋を残して部室を後にしたのだった。

@

「しかし、びびった」

帰り道、堤防沿いの道で俺は呟いた。

アバターが女の子だったことではない。新聞のことだ。

松永順は実は俺の双子の弟だ。いろいろ因縁があって、苗字も違うし見た目も似てない。

新聞をシュレッダーしたのはそのためもある。

「ていうか、ノーベル賞か」

弟はハッキリいうと自他共に認める天才だ。だけど、あいつは俺から大事なものを奪った。

「あれ？ そこにいるのは直江ちゃんですか？」

突然、やたらに幼い声がかけられる。

「せ、先生……」

声をかけてきたのは中学時代の担任、立花凜歌先生。

「また一層白くなったですか？」

ぱつと見、この人の方が生徒なんじゃないかと思うほど若い。実際、年齢的にも若く現在教員歴4年だ。どこその学園都市のミニ教師ほどでないのが救いだ。

「そういう先生こそ、縮みました？」

「なっ！ そ、そんなことないです！ 毎日牛乳を1リットル飲んで、ちゃんと伸びて146cmです」

「カルシウムとるにはCBPが大事らしいですよ？」

しかし、なんてカルシウム吸収効率の悪い人だろうか。そのうちカルシウム取っても骨すかすかの怪奇現象とかでテレビに出そうだ。

「そっいえば、弟さん。ノーベル賞候補だそうですね」

「ああ、まあ。死ねばいいのに」

「因縁深いですね。たしか生物学の分野ですから、えっと、内部被曝に効く薬の取っ掛かりを作ったとか」

凜歌先生は俺の過去を知る数少ない人だ。順という【善良な天才少年】の過去も、同時に。

「くそっ。渚を殺して悠々と生きやがって！」

「復讐に生きても何にもならないというのは、戯語に聞こえます」

ね

松永順。コイツは俺の弟であると同時に俺史上最悪の人間だ。コイツは自らの地位安定の為、渚を殺してのうのと生きてる。

凜歌先生は順が俺のクラスメイトを利用しようとした事件に巻き込まれ、それを知ってる。

「何がなんでも、あいつだけはこの手で……」

殺す、とまでは言わなかった。しかし、先生には伝わった。

「私は直江ちゃんに、人殺しになって欲しくないのです。昔と違って、直江ちゃんがいなくて悲しむ人はたくさんいるのです」

先生はそう言う。だが、順とはどんな形であれ、ケリをつける。

矢作川に沈む夕日が、俺の決意を照らした。

「そういえば、先生は九州の出身でしたな」

「そうですよ？ 愛知県は数学に力を入れてるそうで、私は数学専門なので興味が出ました」

暗い話題になったので、明るい話題にしてみた。

「数学ねえ。おかげでこちらは余分な問題集渡されましたけどね」

「数学の友ですね。暇つぶしのおやつがわりには調度いいですが、苦手な子には厳しいですね、あれは」

愛知県は数学に力を入れていて、愛知県在住の中学生には数学の友なる問題集が配布される。あんな友達、絶交したいね、俺は。

凜歌先生は数学が好きだが、苦手な生徒の気持ちがわかる人だ。教師として、かなり立派なタイプ。

それから俺は先生と雑談して別れた。一人、自宅へ向かう。

夏が近いだけに、まだ日は出てるが暗いものは暗い。大通りとはいえ、不審者に気をつけよう。

最近は切り裂き魔とやらも出ることだし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7928z/>

ドラゴンプラネット

2011年12月29日17時49分発行